

お茶と私

小 泉 ひろみ

(秋田県医師会 会長)



会議などでお世話になっている日本医師会副会長の釜范敏（かまやちさとし）先生は、自己紹介に「趣味は茶道」と書かれています。私は、趣味を聞かれて「旅行」「映画鑑賞」「音楽鑑賞」などと答えることはあっても、「茶道」とはなかなか言いづらいところがあります。

実は私は、現在裏千家秋田支部で「小泉社中」を引き継いでいます。後で述べますが、祖父が秋田支部立ち上げ時に初代支部長となり、祖母が小泉社中を始めました。母は医師を職業としていましたが、祖母のお稽古の手助けをするとともに、精神科病院のデイケアなどでお茶を教えたりしていました。私が小さい頃は、祖母のお茶会に参加してお茶をいただいたり、初釜の際にお楽しみくじのお手伝いなどをしておりましたが、お茶の世界とはほぼ無縁で暮らしてきました。

平成4年に実家に帰ってきてからは、主に母のお稽古日に運転手となって、お茶のお稽古に参加していましたが、病院勤めの多忙さや疲れで、あまりお茶の世界に熱心ではありませんでした。秋田の茶道の事情に詳しいある女医さんから、半分冗談だと思いますが、「医師の仕事をしている場合ではありませんよ」、「お茶の世界でちゃんとやるように」と言われた時はピンときていませんでした。小泉社中は、祖母の下、古くからのお弟子さんや母の兄弟の奥様たちが支えていて、学校茶道も受け持っていた叔母の一人が特に熱心にお茶のお稽古をやってくれていましたし、その娘さんたちもおり、どなたかに引き継いでいただけるのではないかと

思っていたせいもありました。

祖母の後を継いだ母は、高齢になってもお茶のお稽古の場が大好きでした。もともと母は明るい性格で、お弟子さんたちも母に大変良くしてくださっていたからだと思います。母は変形性膝関節症で、人工関節に変換する手術をしたため、お稽古でもお茶会でも正座ができなくなりましたが、杖をついても、手押し車を押してでも、お稽古には晩年までずっと通っていました。頼りに思っていた叔母がお茶の世界を離れ、その後母が亡くなり、小泉社中を閉じようかと思いましたが、母を慕ってくれていたお弟子さんたちが、思いのあるお茶室でお稽古を続けたいと言ってくださったため、迷いましたが、社中を引き継ぐことにいたしました。

しかし、想像していただけたと思いますが、私はお茶の世界では初心者そのままです。利休居士のお言葉である利休道歌に「稽古とは一より習ひ十を知り十よりかえるもとのその一」という歌がありますが、私の茶道はいつも「一、二、一、二」という歩みのように思っています。言い訳になりますが、お茶は季節によって様々なお手前があり、お道具が変わったり、勝手が変わったり、めまぐるしく変化します。歴代の宗匠の方々が、様々な趣向を凝らしてくださったからだと思います。茶道の基本中の基本が、お客様との一期一会を大事にして、いかにおもてなしをするかに専心することであるからなのでしょう。

そんな超初心者のままの私ですが、お茶のお稽古の場は大好きです。父は内科の開業医でし

たが、夕方のひとときに、一碗の抹茶を母や私に所望しました。父には特にお気に入りのお茶碗があり、それで立てた私の下手な薄茶も飲んでくれました。父や母は「お茶は総合芸術だ」とよく話していました。禅の世界があり、お道具の見立て、お花、お香、和菓子、どれ一つとっても、それぞれ深い世界です。父や母がお茶碗などを求めて窯元に行くのに付き添ったこともあり、お道具の一つ一つに思い出があります。その際の旅行の思い出もありますが、「これは、あのお茶会で使ったっけ」などとお道具を通しての思い出もあります。美術館で見る国宝級のお茶碗などのお茶道具は、うっとりするほど素晴らしいのですが、やはりお道具は手に取って使うことができることが喜びだと思います。おそらくお道具の方も、人の手で使われることを望んでいるのではないのでしょうか。

お茶室でのお稽古は、障子を通して日が差したり、釜のお湯が沸く音だけが聞こえたり、お炭やお香の香りがしたり、鳥やカエルの声が聞こえたり、カリンの実の落ちる音が聞こえたり、静謐さとともに五感が刺激されます。また、初心者ならではですが、普段の知識や感覚がまったく役に立たず、ブレインストーミングされている感覚が、とても気持ち良いのです。通常の理屈は通らないけれども、確かにその方がお客様に気持ち良く過ごしていただくことを考えているなあと毎回のよう感じ入っています。

母が元気な頃はお茶懷石もやりました。お客様やご亭主をはじめとする表舞台は、静かで穏やかな雰囲気があるのですが、水屋という裏方では、たくさんの方々が準備をしたり流れが滞りなく進むように忙しく動くわけです。大変な気配りがあります。夜咄^{よばなし}の茶事は、燭台^{ちやじ}の灯りでお迎えをしたり作法も進むため、美しくもあり、忘れられない思い出です。そして、何よりお茶の場が好きなのは、祖母や母のお弟子さん

たち（今や私のお師匠さんたちですが）がよくしてくださるので、普段忘れていた祖母や母の元気な頃が思い出されるひとときになるからかなあと思います。

母には、実の妹が一人います。比較的若くして、東京の医師に嫁ぎました。秋田にいた頃、叔母は日本舞踊を習ったりしており、大事にされていたのではないかと思います。その叔母が、昨年亡くなりました。母は、その叔母と大変仲が良かったこともあり、横浜に転居した後も、家族でいろいろお世話になったりしました。私も従姉妹たちと仲良くしておりましたので、先日仏前にお参りした際に、叔母が大事にしていた古い本を2冊もらってきました。「淡交会秋田支部四十年史」と祖父の句集「秘色」でした。

祖父はいわゆる数寄者であったようで、若い頃から骨董が好きで、自分でお茶碗を焼いたり、句会を開いたりしていたようです。今でも医者さんたちの中に、同じような趣味を持つ方がおられますが、当時のことを思い出しますと、祖父は仕事や趣味に忙しくしていたので、比較的若くして亡くなってしまったのかなあと思います。そんな祖父がお茶の世界に入っていたのも自然な流れであったように思います。

秋田県の裏千家支部は、昭和16年発足したということです。「四十年史」には、私が子どもの頃にお会いしたことのあるお茶の先生方や祖父母の写真もあり大変懐かしく拝見しました。母が祖母のことを書いた「母の事」という寄稿もありました。叔母の娘たちからもらった「四十年史」でしたが、しばらくは私の手元に置かせてもらいましょう。

私は、自分自身は何事にも中途半端であると思います。極めるというタイプではないのです。茶道の世界に専心されている方々には申し訳ありませんが、もう少しお茶席の隅にいらしていただきたいと思っております。